

『大漢和辞典』編纂・刊行小史

(大8)「漢字整理案」(二千六百余字)作成に、上田萬年、芳賀矢一、服部宇之吉、林泰輔、松井簡治、岡田正之、保科孝一、諸橋轍次、後藤朝太郎、山口察常、金井保三が当たる。

1923(大12) 5月「常用漢字表」1,962字
(臨時国語調査会)新聞各社で歓迎
されたが、関東大震災により実施されず。

1923 (大正12) 9月1日 関東大震災

1925 (大正14)

鈴木一平、諸橋轍次に漢和辞典編纂を依頼。

1925(大14)「常用漢字字体整理案」

1928 (昭和3)

「漢和辞典」出版に関する契約が成立。

1926(大15) 11月 改造社が『現代日本文学全集』全三十八冊(各冊1円)の企画発表。円本ブームの始まり。

1930 (昭5) 円本ブームの終焉。

1931 (昭和6)

語彙カードの作成などの基礎作業を続けている中で、『字源』(簡野道明著)の倍程度という当初の計画に収まらないことが判明、諸橋は鈴木に計画の変更を申し入れる。鈴木は熟慮の末、「先生の気の済むまでやってください」と返答する。

1931 (昭6)「常用漢字表」1,858字(臨時国語調査会)

大正12年発表の「常用漢字表」を修正したものだが、満州事変勃発により中国の地名・人名等の報道が必要となり、漢字制限そのものが不可能となる。

1931 (昭和6) 満州事変勃発 / 1932 (昭和7) 満州国建国

1933 (昭和8)

大修館書店附属特設組版工場を新設。

1934 (昭和9)

編纂所を豊島区雑司ヶ谷の諸橋邸内から杉並区天沼に移転、「遠人村舎」と名付け、原稿の整理・浄書を進める一方、大修館では組版を開始する。

1936 (昭和11)

遠人村舎、現在の新宿区西落合の諸橋邸内に移転。

1937 (昭和12)

全原稿の棒組(38, 591段/9, 648頁分)完了。

「当時使用されていた活字の漢字数は僅かに八千字前後であり、しかもその大部分は、辞書活字としては殆ど使用出来ないものであった。即ち辞書活字は一点一画たりともゆるがせに出来ないばかりでなく、更に使用活字は三号(親文字・篆文用)・五号・九ポ・八ポ・七ポ・六ポとあり、これを満たす為には使用活字は各種ごとに、総べて木版に新しく彫刻する必要に迫られた。当時一流の木版彫刻師数十名を動員してこの難業に取り組んだが、数十万本の数量を彫り上げるのに数年の歳月を要した。」(鈴木一平「出版後記」)

1941 (昭和16)

棒組(15, 436段/3, 859頁分)が増補される。

1937(昭12) 装丁に金箔の使用禁止。

1938(昭13)・「漢字字体整理案」(国語審議会)

昭和6年発表の常用漢字表の文字
について字体を整理したもの。

- ・装丁に皮革の使用禁止。
- ・新聞・雑誌用紙の制限。

1940(昭15)「日本出版文化協会」(出文協)設立。

1941 (昭16) 米国、石油・屑鉄の対日輸出禁止。

1939 (昭和14) 第二次世界大戦始まる
1941 (昭和16) 12月8日、ハワイ真珠湾攻撃 太平洋戦争始まる

1942 (昭和17)

統制機関との折衝の結果、ようやく一万部発行の許可を得る。

1943 (昭和18)

- ・6月4日、「大漢和辞典出版記念会」を催し、予約募集を開始する。
- ・9月10日、「巻一」刊行。予約部数は三万部に達する。

1945 (昭和20)

- ・2月25日、東京空襲により大修館書店の社屋と巻五までの一万部分の印刷用紙を保管していた倉庫、および巻二印刷中の附属工場が焼失、巻三以降の組置きしていた原版一切が烏有に帰し、100トンの鉛塊と化す。
- ・3月11日、諸橋は巻二以降の校正刷(約一万五千頁)三セットの内、一セットを手元に置き、静嘉堂文庫と三菱所有の宝鋺山(山梨県都留市)に各一セットを疎開させる。

1942(昭17)「標準漢字表」2528字

(国語審議会)

1943 (昭18) 出文協が解消されて新たに「日本出版会」が設立され、出版物の事前審査・用紙割当てに加えて出版社の整理統合が行われる。

1945 (昭和20) 8月15日、第二次世界大戦・太平洋戦争終結

1946 (昭和21)

鈴木一平、諸橋轍次に『大漢和辞典』刊行事業再興の意思を伝える。諸橋は戦火を免れた校正刷をもとに原稿の再整備に着手。

1951 (昭和26)

写真植字機発明者の一人、写真植字機研究所の石井茂吉社長に『大漢和辞典』用原字制作を依頼する。

1953 (昭和28)

大修館書店本社内に写真植字部を新設する。

1945 (昭20)「(12月24日)国語審議会あり。

米軍より国民学校に於ける漢字数を一千五百以内にせよとの指令でたれば、其の選択を為さんが為也。」(「止軒日曆」)

1946 (昭21) 11月「当用漢字表」1,850字告示。

1949 (昭24) 4月「当用漢字字体表」告示。

1951 (昭26) 5月「人名用漢字別表」告示。

1954 (昭和29)
本社写真植字部と写真植字研究所において写真植字による組版を開始する。

1955 (昭和30)
11月3日、『巻一』刊行。

1960 (昭和35)
1月 石井茂吉、約五万字の原字と篆文約一万字の制作を完成させる。
5月25日 巻十三 (索引) 刊行。
「初版」全十三巻完結。

1964 (昭和39)
修訂を兼ねた「縮写版」の編纂開始。

1966 (昭和41) ~1968 (昭和43)
「縮写版」全十三巻 (A5判) 刊行。

1974 (昭和49)
東洋学術研究所 (所長 鎌田正) を設立、本格的修訂作業の開始。

1981 (昭和56) ~1982 (昭和57)
『広漢和辞典』全四巻刊行。

1984 (昭和59) ~1986 (昭和61)
『大漢和辞典 修訂版』 (A4判) 全十三巻刊行。

1989 (平成元) ~1990 (平成2)
『語彙索引』刊行。『大漢和辞典 修訂第二版』全十四巻として刊行。

2000 (平成12) 年
十五巻目となる『補巻』刊行。
『大漢和辞典』全十五巻 (B5判) 完結。

「大漢和辞典の原字制作が始まってからの石井には、日曜もなければ正月もなかった。……一辺一六ミリの正方形の中に、一五ミリの正方形がうすく入っている原字用紙を用い、そのわくの中に、初め、鉛筆でおよその下書きをし、ガラスの丸棒を定規代わりに器用に使って、直線は丸ペンで、曲線は小筆を使って、巧みに書いていく。定規とか、烏口はほとんど使わなかった。」

(『文字に生きる』写研 1975)

「大漢和辞典は整齊にして雅味ある石井式の細明朝体の文字をもって内容を飾ることができた。」

(諸橋轍次／『追想 石井茂吉』より)

- 全集・百科事典・豪華本ブーム
- 月販ルート (割賦販売) の参入。

1978 (昭53) ・日本語ワードプロセッサ「JW-10」(東芝) 発売。
・JIS漢字 (第一水準 2,965、第二水準3,384) 以後、1983年、1990年、1997年に改定。

1981(昭56) 10月「常用漢字表」1,945字告示

1986(昭61)『漢語大字典』全八巻刊行。
(四川辞書出版社・湖北辞書出版社)
親字数 約54,000字。

1990(平2)「補助漢字」5,801字

1994(平6)『中華字海』(中華書局) 刊行。
親字数 85,568字 (熟語なし)

2000 (平12)・「JIS漢字」(第三水準 1,249、第四水準2,436)。2004年改定。
・「表外漢字字体表」1,022字。
国語審議会答申 (印刷標準字体・簡易慣用字体)

■昭和の初め、鈴木一平が「後世に残る良書を」と諸橋轍次に漢和辞典の編纂を依頼してから修訂・増補を含めて七十余年にして編纂事業を了える。